

# 親の感想

## 伸びゆく我が兒

私は長女、長男共に東京女子高等師範學校附屬幼稚園の惠れたる保育を受けてゐる仕合者で、この度長女は幸運にも同附屬國民學校へ入學を許されたる重ねの果報者である。この機に同幼稚園にて温きはぐくみの中にのびて行く二人の我が子の姿につき二三記し度いと思ふ。

### 生活の秩序化

「頑是無いさいふ言葉通りの我が兒、親の自分からはさうやら格好がついてゐるやうに思つてはゐるものの、他人様からは全く他愛もない赤ん坊にしか見えないであらうその我が子に、入園後暫くしてなんさなく「生活の秩序化」が感ぜられ、就寢前の「おやすみなさい」も、ぐつつた晩以外は大抵かゝらず、親の自分が先づ幼稚園に感謝させられた。

### 食前の偈

「兵隊さん有難うございます。戴きます」、私もつれ込まれて一緒にお辭儀をして箸を採る。幼稚園の日々の躰により皇軍に感謝しつつ、天恵を戴く子供の姿をジッと見入り私は、合掌したくなる程の有難さを感じる。この幼児期から皇恩神徳に限りなき感謝を捧げる尊い心持を植ゑつけて戴くことの有難さ。私も子供のこだらぬ純一さに勢づけられ、食前の偈、食後の偈を唱へて戴く。もう子供に教へられてゐる。

### 言葉の洗練

語彙は豊富になり、言葉遣は段々巧になる。入園後半歳位になるに驚く程言語生活が洗練され、表現、言廻しなき著しき進境を示す。田舎生れの私は子供の東京語の自然さ

にかなはなくなる。

### 心の豊かさ

幼稚園日々のお話・手工・圖畫・唱歌・遊戲・運動等を通しての保育薫化は、子供の精神の啓培向上に大きな力を及ぼし、新しい知識の累増は勿論のこと、ものゝ觀察の仕方、更に感得力をも加つた如くに見え、知の量の増加に止らず、複雑さゝ能動性を持ち、精神生活の充實展開が種々の事象に現はれ、なんさなく心の豊かさを加へて来る。

### お繪描き

「お繪かきが大好き」長女は、自己の趣味を語るやうになる。何んでも好んで描くが、殊に人形・お家・御菓子・海や山等の繪が多く、夏の海濱生活や時たまの汽車旅行は半年間位題材となる。日曜などは母の制止もきかず半日位描き耽つてゐる。女兒だけに一般に優しい畫材を優しい畫因で描く。幼稚園に入つてから、ぐつこ上手になり、自分も幼稚園での習作を私に見せるやうになる。

長男の方は長女には及ばない。然し自ら獨自性をもつてゐて、軍艦・飛行機・汽車・自動車等の乗物が多く、それが段々變つて、是等の乗物の動いてゐるところを描き、次にはこの動的のものを更に綜合して、海面には軍艦か白波を蹴立てゝ進む、その上空では飛機の空中戦が行はれてゐるところを描き、爆彈破裂の情景迄描く、最も個々の繪は餘

りうまくはないが、綜合的の表現形式を採るやうになる。爆彈の破裂なごうすぎたなく描く。

飛翔中の飛行機なご極めて簡單に描くが感じは出でゐる。市電が車庫に入つてゐる光景が餘程印象的だつたさ見えて繰返しく描く。線路が數本に分岐し、架空線が入り亂れ、ヘッドライトが頭を並べ、薄明りのする屋根の感じ等をいさも大膽にあつさり描く。繪の拙い私なご一寸手を出し兼ねるやうな車庫に並んでゐる電車をこさもなく描く。入園前は描いたものの説明をきかぬさ分らなかつものが一年も経たぬ中になんさか纏つた構圖になる。

### 師

「私の先生は菊池先生」

「僕の先生は清水先生」

こは、兩人の片言雙言の中に迄浸み出でゐる。師に對する絶對の尊敬さ無限の信頼を把持し居るこを知つて、この子供はなんて仕合者だらうさつくづく思ふ。私は滅多に送り迎へなごしないが、時に都合のつくさきには、子供が珍しがるまゝに行く。

丁度迎へに行つたさきの事、待つてゐるさ菊池先生の後に元氣な園兒達について出て來た。子供は順々に引渡される。私の小さい長女は先生の脇の下から、まるで親鶏の羽

の下から顔を出す雛のやうに出て来た。「庇護」の語をまざまざと形の上で見た。

### 弟への影響

四歳の次男「僕幼稚園に行くの」

ミ、長女・長男の幼稚園生活が強く影響し、唱歌やお繪書きのまねを始め、この次男の生活の上に長女・長男の幼稚園

## 或る日の幼稚園

幼い子の手をひいて、親のみが味ひ得る悦びに胸をさきめかせつつ、幼稚園の入園式に臨ませていただきましたのも、未だ昨日の事のやうに思はれます。

二年の歲月は流れ去つて、——これもすれば母親のふところを戀しがつた幼いものたちも、今は、それ／＼望みの國民學校に各自の全力を擧げて突進して行く、たくましい子供達になりました。

よくぞこのやうに育てあげて下さいましたものミ、驚嘆し、かつは隨喜し　唯々先生方の御恩を感謝申上げるばかりでございます。

生活が大きく反映して來てゐる。特に面白いことは、夕食後學藝會ミ稱して、長女・長男が交替で唱歌を歌ふミ、次男もよろ／＼出て來て、自分でお辭儀をし乍ら、拍手し、たゞ／＼しく歌ひ終るミ又お辭儀ミ拍手を一人ですまし嬉々ミして喜ぶ。幼稚園の生活は我が家の團樂にまで及ぶ。

(昭和十八年二月九日)

## 前田善子

我々は、空氣や日光の有難さを、毎日意識しながら暮してをりませうか？その恩恵が餘りに大きすぎますので、私にござりまして、幼稚園は意識の對照ミはならなかつたのでござります。何か幼稚園に對しまして、批判の餘地があるミいふのでしたら、それが私共の意識の中に浮び上つて來る筈でございます。唯、満足の他にないものもない場合、もつたいない事ながら、大恩になれきつて、その儘に日々をすごしてまゐりました。

例ミしては、いささか當を得てをらないかも知れませんが、或る方が「健康ミは、自分の體内に何の所在も意識され